

## 要旨

### 正宗白鳥訳「小百合」における教育批判と社会批判

ピーテル・ヴァン・ロメル

本論文では、正宗白鳥が和訳したヘンリク・シェンキエヴィチ作の短編「小百合」（『教育界』1904年3月）に注目し、正宗が重訳したと思われる英訳原文を明らかにした上で、日本の教師たち向けに発表されたこの翻訳作品の意味を検討する。ポーランドの大小説家シェンキエヴィチは、この作品でドイツ支配下において占領者による公教育がポーランド人の文化と言語を蹂躪するさまを告発した。本論文は、このドイツの教育を模範とした日本では、「小百合」が教育における児童中心主義を顕揚するだけでなく、日本の公教育そのものの矛盾をも痛切に突く効果をもっていたことを論証する。また、人間の内面を複雑に描く特徴も確認することで、当時胚胎しつつあった自然主義文学との共通点を指摘し、日本におけるシェンキエヴィチ受容の独特な側面を明確にする。

## Abstract

Questioning Modern Education and Society in Japan: Masamune Hakuchō's translation of Henryk Sienkiewicz's "From the Diary of a Tutor in Poznan"

Pieter VAN LOMMEL

In March 1904, Japanese novelist Masamune Hakuchō's short story "Sayuri" (Lily) appeared in the education magazine *Kyōikukai* (*The World of Education*). It is a translation of Polish Nobel laureate Henryk Sienkiewicz's "The Diary of a Tutor in Poznan" (1879), a story which strongly criticizes the oppression of the Polish language and culture under the German Kulturkampf by relating how German education in Poland brought a little Polish schoolboy to a tragic death. This paper clarifies which English translation Hakuchō used as source text for his Japanese translation and analyzes the meaning "Sayuri" took on in its Japanese context. It is argued that the publication of this story in *Kyōikukai*, a magazine aimed at teachers, not only foregrounded the powerful plea for child-centered education in this novel, but also allowed for indirect criticism of Meiji Japan's increasingly nationalist education policy given the direct link between Japanese and German education. In addition, this paper draws attention to the complexity of the 'weak' protagonists in "Sayuri", concluding that Hakuchō's reading of Sienkiewicz should be interpreted within the emerging naturalist literary movement in Japan at the time.

# 正宗白鳥訳「小百合」における教育批判と社会批判

ピーテル・ヴァン・ロメル

## 1. はじめに

日露戦争が開戦した直後の1904年3月に、雑誌『教育界』3巻6号に正宗白鳥の翻訳小説「小百合」が発表された。この「小百合」という作品は、ポーランドの大家作家ヘンリク・シェンキエヴィチ（Henryk Sienkiewicz, 1846-1916）が1879年に発表した短編小説「ポズナンの教師の日記から」<sup>1</sup>の英訳からの重訳であるが、初等教育と中等教育の教師たち向けの雑誌『教育界』に掲載されていたためか、文学研究者にはあまり知られていない。『正宗白鳥全集』にも収録されておらず、学術研究の対象ともなっていないこの翻訳小説について翻訳過程の詳細を明らかにし、この小説の位置づけを提供することが本論の重要な課題である。

まず短編小説「ポズナンの教師の日記から」のあらすじを紹介する。この作品は、病弱な家庭教師であるパブリケビチという人物が、教え子ミハスの悲惨な運命を顧みて、それについて一人称で語る短編小説である。ミハスは財産の大部分を失った士族の一人息子である11歳のポーランドの小学生である。無垢な児童で勉強熱心だが、体が弱く頭脳も特別優秀ではないので、あまりいい成績ではなかった。さらに、成功を期待する母親からのプレッシャーや、小学校で話さなければいけないドイツ語の問題、ポーランド民族を軽蔑するドイツの小学校教師たちが、ミハスの身体と精神に害を与え、脳の炎症を引き起こし、結局彼は死んでしまう。ミハスの死の一年後、語り手である家庭教師自身も肉体的及び精神的に衰弱して死の間際にあると述べて、話が終結する。

シェンキエヴィチがこの小説を発表した1879年は、ビスマルク下の文化闘争（Kulturkampf）が展開されていた時期であった。文化闘争とは、ポーランド民族の言語と文化、宗教（カトリック教会）を、ドイツの言語と文化、宗教（プロテスタント教会）に置き換えることで、完全な「ゲルマン化」を図る1870年代のドイツ帝国の政策であった。それに抵抗するシェンキエヴィチは、この作品で残酷なドイツの教師たちが無垢なポーランドの児童を抑圧して死に至らせる過程を描くことで、占領国のドイツに対する激しい批判を鮮明に表現しながらポーランド民族の悲

劇を訴えたと解釈できる。そもそもシェンキエヴィチの小説は、ドイツ・ロシア・オーストリアによって占領された「亡国」ポーランドとその民族の悲惨な運命を愛国主義的に嘆く文学として一般に位置づけられている。

しかし明治後半の日本におけるシェンキエヴィチ作品の受容は、ポーランドや西洋における受容とは異なっていたと思われる。次頁で確認できるように、「小百合」は『教育界』の文芸欄に載っていたが、明治後期の最も大きい教育雑誌の一つに掲載されることによって、学校教育というテーマが前面に出される。また、文芸欄の右上に印刷された「原稿及写真募集」という広告の一項目目にある「従軍教育者の写真」（次頁を参照）などが暗示するように、国家主義の膨張と日露戦争の開戦という歴史背景も考慮する必要がある。さらに、発表媒体と歴史背景の他に、「小百合」が新進の近代小説家正宗白鳥の訳業であることも注目すれば、より複雑な意味が読み取れるのではないと思われる。すなわち、ポーランド民族に対する哀れみの他に、鋭い近代教育批判と「弱者」への独特な注目が特徴として浮かび上がってくる。和訳「小百合」は当時の文壇と教育界において重要な作品であったのである。

## 2. カーティンの英訳と西洋におけるシェンキエヴィチの受容

和訳「小百合」は『正宗白鳥全集』に収録されていないが、『正宗白鳥全集 第30巻』（福武書店、1986年）には白鳥が訳したシェンキエヴィチ作品として「少楽師」と「過誤の喜劇」の2編が挙げられている。白鳥がどの原本から訳したかは『正宗白鳥全集』に記されていないが、白鳥は様々な塾や東京専門学校で熱心に英語を勉強していたことから、英語から和訳をしたと推測できる。また、「少楽師」と「過誤の喜劇」と「小百合」は全てジェレマイア・カーティン（Jeremiah Curtin, 1835-1906）が多数の典拠から作品を集めて編纂した英訳本 *Yanko, the Musician and Other Stories* (Boston: Little, Brown, 1893) に収められているので、白鳥はこの本を典拠にして和訳を行ったと考えられる。これを裏付ける証拠は他にもいくつかある。まず1904年の時点では、「ポズナンの教師の日記から」の英訳はこれ以外にはなかったと思われる<sup>2</sup>。また、白鳥の翻訳スタイルは直訳であるが、その文章がカーティンの英訳と一致していることが確認できる。白鳥訳の「小百合」は題名を除けば、明らかにカーティンの“From the Diary of a Tutor in Poznan”の忠実な翻訳である。同様に「少楽師」と「過誤の喜劇」もカーティンのテキストから忠実に訳したと思われる。以下にカーティン訳短編集の全収録作品とそれに対応する白鳥の和訳を挙げる。

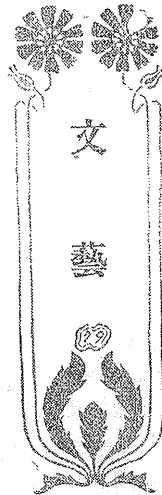
く之を知るを要すること論なし。  
 二、人界物界に亙る大哲理を發見し、人間に安心の地を得せしめむとする學者は、其人界の歸納材料たる歴史（人類學其他にも）に精通せざるべからず。  
 三、歴史は人事歸納の材料なり、故に政治學、經濟學、法學、教育學、審美學、兵學等苟くも人事中の一部に於ける理法の指示者となり、先導者となり、又自ら其科事業に就て實際に完全な世俗的執筆を試みんとするものは、必ずや歴史の豊富なる材料に就て調査する所なかるべからず。

以上述べたる所により、余は余の考ふる所の歴史は如何なる研究なるか、何の爲めに教科となり、何の爲めに研究せらるゝかを論じ盡したり。然れども敢て斯の如しと斷言するにわらずして、唯余は今然か思ふといふのみ。尙ほ更に考定する所あるべし。

### 原稿及寫眞募集

左の諸材料は本誌の内に歓迎する所に有之候間續々御投稿下され度候也 記者

- 一、從軍教育者の寫眞
- 一、從軍教育者に關する美談及其の家庭談
- 一、奉公美談
- 一、各種學校の寫眞
- 一、教育茶話



### 小百合 (小説)

波蘭 シエーンキウツナ作  
 正宗白鳥譯

蔽ふてあれど隙間も洩るゝ燈火の光に、一度ならず二度ならず、我が眠は醒めて、ミハスが、明方近い二時三時に尙學んでゐるのを見た。其小さい弱い身體に、其襟衣のみ纏ふて、前に屈んで書物を讀んでゐる。眠むたげな方のない聲で夜の静けさを破り、ララン語ヤリシヤ語の動詞の變化を繰返してゐるのは、丁度人々が寺でお念佛を唱へてゐる様なのである。予がこの兒に遅いから寝よと云へば、  
 『アブリケビテ先生、私は未だ日課が覺えられないのです』と答へる。

予は彼れに四時から八時まで課業を授け、其上尙九時から十二時まで教へて、殘る暇なく解つたと信じなければ、寢床に就かぬ位にしてゐるのである。されど此の兒には、課業の荷が勝ち過ぎてゐるのである。末の方を省つてしまふ。最初の

図1 『教育界』3巻6号(1904年3月)の文芸欄に載った「小百合」の最初のページ。

Henryk Sienkiewicz. *Yanko, the Musician and Other Stories*. Trans. Jeremiah Curtin. Boston: Little, Brown, 1893.

- “Yanko the Musician” → 正宗白鳥「少楽師」『帝国文学』8巻8号（1902年8月10日）
- “The Lighthouse Keeper of Aspinwall”
- “From the Diary of a Tutor in Poznan” → 正宗白鳥「小百合」『教育界』3巻6号（1904年3月3日）
- “Comedy of Errors: A Sketch of American Life” → 正宗白鳥「過誤の喜劇」『太陽』10巻12号（1904年9月1日）
- “Bartek the Victor”

正宗白鳥がシェンキエヴィチの『クオ・ヴァディス』を愛読し、後に有名となった『何処へ』（1908年）の題目をシェンキエヴィチの作品から借りたことは既に指摘されているが<sup>3</sup>、5編中の3編を訳していることからシェンキエヴィチ作品に対して白鳥が1900年代に強い関心を抱いていたことが読み取れる。白鳥の関心を検討する前に、カーティンの英訳の特徴を明らかにしておこう。

カーティンはフランス語やスペイン語、ドイツ語、ロシア語、ラテン語、ギリシア語など多言語に通じるアメリカ人の言語学者であり人類学者であったが、特にシェンキエヴィチの翻訳者として知られている<sup>4</sup>。カーティンの翻訳スタイルは原文の語句に忠実であり、“From the Diary of a Tutor in Poznan”も直訳調である<sup>5</sup>。カーティンは短編集 *Yanko, the Musician and Other Stories* に序文を付加し、読者であるアメリカ人にシェンキエヴィチ作品のどこに注目すべきかを、次のように説明した。

In two of the stories, however, there are characters not familiar to Americans, and to these I beg to call attention in this place.

The first of these is the schoolmaster [...]. The German schoolmaster among the Poles takes the place of the missionary of old times [...] called in to make the conquest permanent by assimilating the Slavs to the Germans [...].

Hence Sienkiewicz presents to us the teachers who brought little Mihás to his death and Bartek the Victor to prison and financial ruin.

しかしこれらの小説のうちの二編では、アメリカ人になじみのない登場人物が現れるため、ここでぜひ注意を喚起しておきたい。

まずは学校教員である。（中略）ポーランドにおけるドイツ人の学校教員は、かつての宣教師のように、（中略）スラブ民族をドイツ民族に同化することで

征服を完成させる使命を帯びていたのである。(中略)

それゆえシェンキエヴィチは、可愛らしいミハスを死に追いやり、またパーテック・ザ・ヴィクターを投獄して経済的にも没落させる教師たちを描いているのである。<sup>6</sup>

このように、カーティンは序文でポーランドとプロイセンの歴史的な背景を説明しながら、シェンキエヴィチの小説の中心的な主題を、ポーランド民族への圧迫に対する批判としてアメリカの読者たちに紹介している。

シェンキエヴィチと彼の作品の特徴の一つが愛国主義であることは間違いない<sup>7</sup>。しかしながら、初期の短編小説が愛国主義だけではなく、貧困や社会階級 (“Yanko the Musician”)、学校教育 (“From the Diary of a Tutor in Poznan”)、アメリカへの移民 (“Comedy of Errors”) といった当時の社会問題を批判的に扱う側面を持っていることにも注目すべきである。さらに、モニカ・ガードナーやミクジスラフ・ギルギルヴィチも指摘したように、多くの作品が憂鬱さと厭世主義を色濃く漂わせて、助けを得られない登場人物が死に瀕する過程を細かく描く陰気な傾向も著しい<sup>8</sup>。

英訳書の序文で近代社会が生み出す諸問題への配慮と厭世主義の傾向という特質に触れないカーティンはある意味で西洋におけるシェンキエヴィチの受容を象徴すると言えるかもしれない。シェンキエヴィチの文学は現在ポーランド以外では忘れられているため、最近では研究もほとんど出版されないが、英語とフランス語の先行研究を参考にすれば、西洋におけるシェンキエヴィチの積極的な受容が主に長編歴史小説、ことに『クオ・ヴァディス』を中心に行われてきたことが分かる<sup>9</sup>。シェンキエヴィチは歴史小説でポーランドの歴史とポーランド国民の勇壮さと彼等が戦った戦争を生き生きと描き、ポーランド民族の偉大さと悲劇をロマンティックに謳った。アメリカとヨーロッパの読者たちはウォルター・スコットやアレクサンドル・デュマの小説にも類似した、生き生きと物語られる歴史と冒険を楽しみ、悲劇とユーモア、抒情的な表現に感動した<sup>10</sup>。また、シェンキエヴィチ作品のキリスト教的な内容も西洋の公的な道徳と一致しているが、そのことはこの作品の圧倒的な人気を説明するものである。ネロ治世下のローマ帝国で迫害されたキリスト教徒を描いた『クオ・ヴァディス』は無論、カトリック雑誌に掲載された英訳 “Paul” (*Catholic World*, June 1884) や “For Bread” (*The Ave Maria*, 1892)、“Little Janko” (同誌同年) もその例である。総じてマリア・コスコが論じた通り、1900年前後に現れた、自然主義と物質主義への抵抗や理想主義とロマン主義の復活、新キリスト教主義の流行がシェンキエヴィチ・ブームの社会的背景を成していた<sup>11</sup>。シェンキエヴィチが1905年に特に「散文叙事詩に対する顕著な貢献に対して」<sup>12</sup>ノーベル賞を贈られ

たこともこうした受容の傾向の例証である。

一般大衆の間で大きな反響を呼んだシェンキエヴィチのロマン主義的な歴史小説と彼の理想主義、またキリスト教的な内容を中心とした西洋における受容と比較して、和訳「小百合」による日本での受容にはどのような特徴があるのかを、以下で検討する。

### 3. 和訳「小百合」の背景

和訳「小百合」が出現した背景としては西洋におけるシェンキエヴィチ・ブームと訳者白鳥の批判的な精神が最も重要であると思われるが、日露戦争の勃発も「小百合」が発表された1904年の歴史的な背景の重要な側面であるため、考察を必要とする。日本とロシアの間の摩擦が激化する過程で、ロシア占領下におけるポーランド人の悲惨が日本人の注目を集めた。例えば、『読売新聞』が「ポーランド」に言及した記事の数を調べてみると、この時期にポーランドへの注目が急激に高まったことがはっきりと見える。

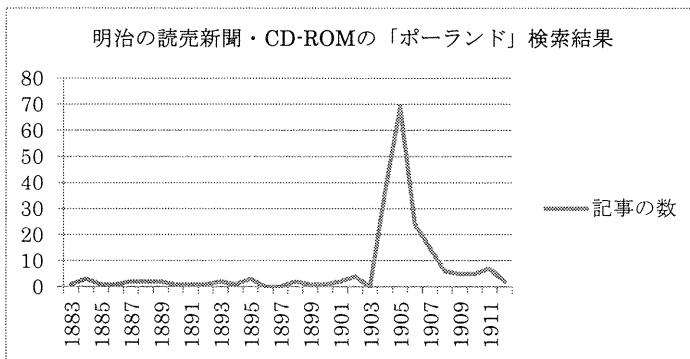


図2 読売新聞社メディア企画局データベース部編『明治の読売新聞・CD-ROM』読売新聞社メディア企画局データベース部、1999-2002年。

ポーランドと同じくロシアを敵とする日本は、ロシアに支配された「亡国」ポーランドとポーランド民族の悲惨な状況に共感しながら、被圧迫者のポーランド民族の置かれた状況を日本人への警告とした。ポーランドと同様な運命に合わないよう、日本の国家と文明をロシアの侵略主義から守らねばならない、という考え方が

支配的であった。つまり、日露戦争前後のポーランドへの注目は戦争を正当化する戦略として解釈できるのである<sup>13</sup>。

しかし、そうしたポーランドに対する関心の高まりがあったとはいえ、白鳥は単純に社会の趨勢に従い、ポーランド民族に同情したためにシェンキエヴィチを訳したわけではない。白鳥が日露戦争の熱狂から距離を取り、戦争の賛美と国家への忠誠を文学の役割とする考え方を強く批判したことは知られている通りである<sup>14</sup>。例えば、日露戦争中『読売新聞』に寄稿した記事「戦時の文学」において、正宗白鳥は戦争を題材とする小説や新体詩を「読者の歓迎せられない」「俗っぽくなるのみ」<sup>15</sup>のものとして厳しく批評し、戦争と国家に尽くす文学という概念自体を以下のように直接に批判した。

詩人は軍隊の尊敬によりて生存しているのだから、大に其の功を歌へよ、国家の一人であるから国家の活動を謳歌せよといふものがあれどこれも訳の分らぬことである。(中略) 文学者は自分丈で好きな事を書いて居らうなら、それで沢山で、何も戦争や政治の手先に使はれる必要はない。<sup>16</sup>

シェンキエヴィチの和訳の歴史的背景には確かに日露戦争があったが、「国家の活動」に対する抵抗感ないし違和感を痛感した白鳥の姿勢にも注意をする必要がある。そもそも和訳「小百合」は1904年3月に発表されたが、既に1年前の1903年3月の『教育界』誌上でその予告が「次号予告」欄に掲載されていた。つまり、白鳥がこの小説の翻訳作業に取りかかったのはポーランドに対する日本の関心が高まる以前からだったということである。

和訳「小百合」をめぐる背景としては、日露戦争時の日本とポーランドの関係以上に、西洋におけるシェンキエヴィチ・ブームと正宗白鳥の批判的な姿勢を考慮すべきであろう。「小百合」発表の1904年には、正宗白鳥は東京専門学校を卒業したばかりで、まだ一作も創作作品を発表していなかった。白鳥はまず『読売新聞』に寄稿する批評家として、また西洋文学の翻訳者として活動し始めた<sup>17</sup>。既に触れた通り、シェンキエヴィチの作品は当時西洋の至る所で驚くべき人気を集めていた。例えば、ほどなくベストセラーとなった『クォ・ヴァディス』は1900年までにロシア語やチェコ語、イタリア語、英語など合わせて22言語で翻訳された。教皇レオ8世に贈与されたラテン語訳もあった。刊行後の一年間の売り上げ部数はアメリカで400,000部、イギリスで400,000部、ドイツで150,000部、イタリアで40,000部にも至った<sup>18</sup>。『クォ・ヴァディス』に基づいた演劇やバレエ、映画、絵画が特異な隆盛を見て、パリでは走馬が「クォ・ヴァディス」と名付けられ、ベルギーで



は「クォ・ヴァディス」という葉巻が発売された。アメリカでは今も「クォ・ヴァディス」というレストランが存在する<sup>19</sup>。シェンキエヴィチは1901年からノーベル賞候補者に挙げられ続け、そして実際1905年にノーベル文学賞を受賞した。正宗白鳥がナサニエル・ホーソーンやモーリス・メーテルリンク、オノレ・ド・バルザック、アントン・チェーホフといった大作家の作品と並んでシェンキエヴィチの小説を翻訳するほど、シェンキエヴィチは有名だったのである。

白鳥が特にシェンキエヴィチを愛読した理由としては、彼が読み取った近代社会に対する批判的な眼差し、性格が消極的でまた病弱である登場人物と白鳥自身との共通点などが考えられる。白鳥が批評家としても自然主義作家としても極めて厳しい批判精神を表したことはよく知られている<sup>20</sup>。「小百合」だけでなく、白鳥がカーティンの英訳短編集から選訳した小説は3作とも社会批判の色が濃いため、こうした社会批判が「小百合」を和訳する主な動機だったと考えてよい。「小百合」における社会批判については以下に検討する。

#### 4. 近代教育に対する批判

シェンキエヴィチは小説「ポズナンの教師の日記から」でポーランドの事情に留まらず、より一般的に近代の学校教育を批判的に分析したが、正宗白鳥は和訳「小百合」でこのテーマを前面に押し出そうとしたと思われる。注目すべきなのは、白鳥がこの小説を雑誌『教育界』に発表したことである。『教育界』は1901年11月3日に創刊され、1923年6月3日に廃刊になった、主に小学校教員を読者対象とする大教育雑誌であった。教育について思想的に幅広く取り扱った『教育界』は、文学にも力を入れ、1901年から1904年の間に23作の短編小説を掲載した。その多くの作品が教師の生活や、生徒・教育に関するものだったことも考慮すれば、「小百合」が日本ではまず教育をテーマとする小説として発表されたことは明らかであろう。和訳「小百合」が『教育界』という雑誌に発表されたことの意味について2点考えてみる。

##### 暗記学習と大人・教員中心主義への批判

「小百合」はミハスという児童の悲惨な運命を描くことで、ポーランド民族の悲劇だけでなく、ドイツ、ことにプロイセンで広く発展した近代教育をも重要な問題とする。正宗白鳥はこの小説によって詰め込み主義と試験勉強、教員中心主義を特徴とする近代教育そのものを告発したと思われる。

ミハスという11歳の小学生は母親を愛し熱心に勉強する無垢な児童だが、毎日

夜更かしをしてラテン語の語形変化を暗記しようとしたため、もともと弱い体をさらに壊してしまう。小説「小百合」は「小さい弱い身体」という設定やラテン語とギリシア語とドイツ語の動詞の変化をつぶやく「眠むたげな力のない声」(76頁)の描写を通じてミハスの虚弱な体質を繰り返して取り上げ、「この小さい頭の中を掻き乱」し、「健康も衰え、命さへ危くなる」(77頁)という過剰な勉強がもたらす害を強調する。「天使のやうな小さい頭を見ると、美しい花が蒼のまゝに萎むか」(84頁)とまで疑われる弱々しいミハスは、小説を通して聖なる弱者として描写されるが、ミハスを「小百合」のように美しく、無垢で純真でか弱い児童として描くこの作品は、この児童を犠牲にする学校教育に対して強い批判を提示している。ちなみに、カーティンの英訳を忠実に訳した白鳥があえて題目だけを「小百合」に変えたことは、教育の犠牲者である可憐な弱者に焦点を与えるためであると考えられる。

わが子を天才と見なして過大な圧力をかける母親とともに、弱いミハスの身体的・精神的な状態を理解しようとしめない学校の教師たちは、暗記に偏り、大人と教師の事情ばかりを重視する近代教育の問題を象徴している。こうした教育を批判するものとして、語り手の家庭教師バブリケビチの、教育を受ける児童一人一人を人間として尊重する立場が示される。以下の引用には、語り手であるこの家庭教師を通してルソーの『エミール』やペスタロッチの教育観に基づいた教育思想が明確に表現されている。

兎に角彼れを運動場で訓練し、充分散歩もさせ、又は馬に乗らせなどして、肉体を強くする必要があつたが、少しも其余暇がない。この児は或は読み或は書き、日々勉むることが多くて、全く寸暇もないのである。衰(ママ)れや、楽みの時間も、健康の為生命の為に必要な時間も、皆ラテン語ギリシア語さては独逸語に奪ひ去られるのである。(77頁)

私教師なれど、予は教師を職としているゆえ、知識の価を信ぜず、知識より出る利益を疑うはふさわしからぬけれど、学問が少年に悲劇を演ぜしむべきものとは思わない、ラテン語が健康を奪い、発音の好拙が児童の運命と生命を左右すべきはずのものとは信じない。また教育の事業を完うするは、小児の手を執って親切に導くのが当然で、足で踏みつくべきではないと思う。この説は可愛いミハスを思ひ出す毎に益々確かめられる。(78頁)

児童が外で遊びながら体を鍛え、個人の発達段階に応じて自然に育つことが理想であるとする児童中心主義は、この小説の前編を通して表現されている。ルソーも『エミール』で古語や外国語、読み書きを早い段階から児童に教えることに強く反対し、

子どもが外の暑さと寒さに触れて健康な体質を作り、自然の中で体験を重ねて学んでいくことが重要だとする説を唱えたが、上記の引用はこれとまさしく類似している。

近代教育が生み出す矛盾と、それを批判するものとして発展した児童中心主義的な教育思想は、日本において1900年代に広まり始めた。その背景としては、まずいわゆる「近代児童像」の普及が挙げられる。マーク・ジョーンズが論じた通り、「児童」を特別な発達段階と見なし、特に児童に対する愛情の必要性を主張する近代児童像は、日本において1890年から1910年にかけてメディア、ことに中流階級の婦人を読者の対象とする家庭雑誌を通じて普及した<sup>21</sup>。無論教育雑誌においても同様の傾向が広まり、このような児童像への注目が高まった。それゆえ、形式にとらわれ、知識に偏向し、注入主義と機械的な勉強を中心とする当時の支配的な教授法は批判的となった。教育雑誌、ことに『教育界』には児童に対して抑圧的な教授法を批判する記事が数多く掲載された。例えば、1902年8月から『教育界』に連載された医学博士呉秀三の「教育と精神病」はまさに教育の競争主義や親からの圧力がもたらす精神的な病気を詳しく論じていた<sup>22</sup>。そして専門家だけではなく、読者の教師たち自身も論文を投稿し、教授法と公教育思想を批判した。『教育界』は懸賞論文の課題として「小学教育を一層有効ならしめ且其の効果を永久ならしむる方法如何」を挙げ、これに答える論文を数多く掲載したが、中には「第二等」として選ばれて最も高評の論文（「第一等」の論文は選ばれなかった）が、進歩的な教育家フランシス・パーカー（Francis Wayland Parker, 1837-1902）に言及しながら、「単に愛てふ一字」や児童と教員との「平等的交際」の重要性を説き、「権威のみ」に基づいた「知識を授興する工場」<sup>23</sup>という小学校に対して痛烈な批判を行った。ちなみに、『エミール』がこの時期に二回も抄訳され様々な教育雑誌でよく宣伝されたことも児童中心主義への関心を示すものである<sup>24</sup>。また、師範学校が1900年代に「ルネッサンス」を見、軍隊に基づいた森式師範教育に抵抗し人道主義に転換し始めた、という傾向も指摘できる<sup>25</sup>。さらに文部省は、学校教育が過剰な競争主義を生み出し、生徒の身体と精神に重大な危害を与えるという問題を認め、明治初期から初等教育の基盤となってきた各学年の進級試験と卒業試験を1900年に廃止したことも見逃せない<sup>26</sup>。もっとも、教授法は相変わらず生徒の発達段階や自発性ではなく暗記と知識、教科書と教師を中心とし続け<sup>27</sup>、中等学校と高等教育は1900年以降も成績に基づいた席順制度や進級・卒業試験を維持し競争の場として機能し続けた事実もあるが、教育批判と新たな教育思想への期待は当時の教育界において論じられていた事柄であったのである。

正宗白鳥はこうした教育に関する論争を意識しながら「小百合」を訳したと思わ

れる。近代教育が正宗白鳥にとって重要な問題であったことは、彼が当時『読売新聞』の記事で書いた以下の文章から確認できる。

尤も仮名でいへる事を殊更に漢語や羅甸語でいひたい人を、外から非難するのも余計なお世話だが、罪のない少年を誘惑して、矢鱈に学問させて、一生を不愉快に送らせやうとするのは、謹んで貰ひたい。<sup>28</sup>

女学生の墮落の原因は小説にもあらず芝居にもあらず、女子教育にあり。男子にても女子にても青春の期を無趣味の学窓に閉込めば人生の半を徒費せしめんとすることが所謂墮落の病根なり。<sup>29</sup>

「罪のない少年」、ことにミハスのような生徒の「一生を不愉快」なものにおとしめてしまい、「無趣味の学窓に閉込め」ることによって人生の半を徒費させるものにほかならない近代教育に対する手厳しい批判は小説「小百合」の内容と一致する。「小百合」は小説の形で近代教育の問題をひときわ強く認識させ、教師たちに教育制度と教育思想、授業法を考え直すよう促す作品として日本で提供されたのである。この作品は、永井荷風が1903年8月に『教育界』に発表した短編小説「海の黄昏」と共に、こうしたテーマを扱う小説として大正時代の新教育運動に先立ち、日本において最も早く出版された作品の一つである。

### 国家主義的教育体制への批判

以上で見たように、近代教育に対する批判と児童中心主義的な教育思想の主張は、もともとシェンキエヴィチの作品にもあったが、白鳥があえて小説の題名を変え、また教育雑誌で発表することで一層強調されたのである。しかし、明治日本、ことに国家主義が膨張する日露戦争中の日本という社会的な文脈は、作品が元々持っていなかった新たな批判を読み取ることも可能にしたと思われる。「小百合」は文化闘争を批判的に描くことでプロイセンを中心とするドイツ帝国の統一を目的とした公教育の非を追及したが、問題は日本の公教育がドイツの公教育と同様な国家統一を主な目的としていたことである。「小百合」の読者は、ミハスやバブリケビチに同情しながら近代教育の問題とポーランド民族の悲劇を痛感するが、ドイツと日本の公教育の共通性はそうした単純な同情を揺るがしたこともあるだろう。侵略主義的なロシアから日本の文明を守るといった認識があった日本人は、言語や文化を守ろうとするポーランド民族にある程度自分たちを重ねることができたとしても、小説においてポーランド民族の文化を奪うのはドイツの教育であり、そして、当時の日

本の教育がドイツの教育に基づいていたことは、読者に矛盾を感じさせる可能性があった。

日本の教育は周知の通り森有礼以降ドイツのそれを模範としてきた。森はドイツと同様に、各個人の発展ではなく、国家の統一化と強化を教育の目的とした。例えば、森は1889年1月28日に直轄学校長に次のように説示した。「諸学校ヲ維持スルモノ畢竟国家ノ為ナリ（中略）学政上ニ於テハ生徒其人ノ為ニスルニ非スシテ国家ノ為ニスルコトヲ始終記憶セサル可ラス」<sup>30</sup>。教育の意味は国家に忠実な人々を養成することとされた。このような教育が行える教師たちを養成するために、森は陸軍少将の山川浩を東京高等師範学校長に任命し、兵式体操を導入した。また、ドイツと同じように、教育の管理は中央集権化された。教育学もドイツに強く影響を受けた。東京帝国大学ではドイツの教育学者のエミール・ハウスクネヒト（Emil Hausknecht, 1853-1927）が1887年から1890年までの間、帝国大学招雇教師としてドイツの教育学、ことにヘルバルト（Johann Friedrich Herbart, 1776-1841）の教育思想を普及させた。一例をあげると、道徳的な品性は、ヘルバルト派教育学の中で最も重要と見なされたが、後に日本において儒教の五倫五常と教育勅語からなる価値観に応じて再解釈されるようになった<sup>31</sup>。そして、1900年代の教育雑誌はドイツの教育制度や教授法に関する記事が極めて多かった。これに加え、ドイツを模範とした明治帝国憲法も、この時期以降のドイツの強い影響の象徴であった。

ドイツと日本のこうした極めて強い結びつきを考えれば、ドイツの教育に対して「小百合」が提示する批判は、日本では国家による公教育に対する批判としての意味を持ったと推察される。「小百合」はミハスに愛情を示さず規律と順序を維持するドイツの教師たちの姿や、ドイツ語の自然な発音が身に着けられず、言葉に詰まるミハスの苦痛、ポーランドの言語と文化を嘲り笑う教師たちと一緒に笑うように強制されるミハスの葛藤を細かく描写することによって、ドイツの公教育がもたらす暴力だけではなく、ドイツを模範とした日本の公教育の暴力も間接的に暴いたと言える。言語と価値観の統一を図る日本の教育政策は日本全国の人々に標準日本語（東京の日本語）と教育勅語が唱道する忠君愛国主義や天皇制イデオロギーを押し付け、さらに「日本人化」を達成するために、たとえば沖縄と北海道において原住民の言語と文化を奪った。日清戦争の勝利によって獲得した台湾においても日本は強権的に公教育制度を拡張し始めた。また、日露戦争は、朝鮮と満州の植民地化の始まりであった。日本が後にアジア大陸各地で試みた教育も、ドイツがポーランドで行った教育と同様であったと言える<sup>32</sup>。ドイツの教育、ことに「統一」政策への批判を行う「小百合」は、国家主義に傾斜する日露戦争中の日本の教育と政治に対して間接的に疑問を投げかけたのではないかと考えられる。

追加すべきなのは、『教育界』に掲載された「小百合」以外の短編小説も国家主義、軍国主義、そして帝国主義を批判の対象としたことである。特に内山懐天の「流星」(1903年3月)は日清戦争と平行して行われた南洋探検隊の派遣を描きながら、日本における学問と帝国主義を批判的に提示した。また、日露戦争の半年前に掲載された永井荷風の「海の黄昏」は立身出世や社会進化論、富国強兵、武士の愛国主義という思想を唱道する陸軍省局長の父親と、学校教育に反発する青年の姿を描くことで、同様に明治国家の大方針に異論を唱えた。こうした批判的な文学作品に並ぶものとして「小百合」を当時の日本の教育に対する非難として読むことは可能であろう。「小百合」は『教育界』に掲載された最後の小説である。次号は「戦時国民の心得」から始まり、「文芸」欄は日露戦争を話題とする漢詩ばかりとなった。雑誌『教育界』は元々多様な意見を比較的平等に並べ、文学的にも多彩な声を聴かせる様々な作品を掲載する雑誌であったが、商業的な理由もあって<sup>33</sup>、結局のところ当時の多くの雑誌や新聞と同様に、戦争と中央政府の政策を支える方針に転換した。「小百合」の最初のページの左上(上記の写真を参照)で募集された「従軍教育者の写真」や「従軍教育者に関する美談及其の家庭談」などはその転換を象徴するが、批判精神に富む白鳥が翻訳し、1年前から予告された「小百合」はむしろ「流星」と「海の黄昏」と同様に『教育界』に載せられた少なからぬ体制批判的な作品として解釈すべきものである。

## 5. 「敗者」を文学の中心に描く——シェンキエヴィチ受容研究の展望

本論は和訳「小百合」を当時の日本の文脈、すなわち発表媒体の『教育界』と日露戦争という歴史背景を視野に入れて検討してきたが、最後に白鳥の文学と自然主義との共通点を指摘し、日本におけるシェンキエヴィチ受容の研究に着手する。この作品の一つの特徴は、弱者ないし敗者への注目である。語り手であるバブリケビチという家庭教師と教え子ミハス、及びミハスの母は三人とも感受性豊かで虚弱な人物である。これらの登場人物たちは弱々しいポーランド人であり、権力を備えた厳格なドイツの教師たちと対照的であるが、彼らには、ポーランド人の弱者対ドイツ人の支配者という単純な二項対立を超えてより複雑な側面が付与されている。

バブリケビチは、一方では教え子のミハスを愛し、彼の世話をしようとするが、他方では理想的とは言えない人物として提示されている。ミハスに親切にする理由の一つは、バブリケビチがミハスの母に恋愛感情を抱いているからであることが作品冒頭から強調されているように、この人物はうしろめたさや倫理的な問題点を背負っている。さらに、バブリケビチは人生に後ろ向きで消極的な性格である。家庭

教師に足りるだけの教育を受けた人物であるが、激しい社会競争には参加できず、ハムレットのセリフを引用しながら近代社会が人間にもたらす悲劇と人生の不可解さを歎く病弱な人物である。またミハスは小学生でありながら、バブリケビッチのような性格付けがなされている。具体例をあげよう。

ミハスの運命は人並ではなかつた。人生の活劇はおし並べて、青春の梢より一葉二葉木の葉の散り初むる頃始る習なるに、彼れには不幸を成すもの——道徳の束縛、秘密の悔悟、心裡の煩悶、甲斐なき努力、困難との争闘、希望の衰滅などを年齢十一にして既に味ひ初めたので、彼れの細い身体と弱い力では到底其れ等に堪へられさうにもない。(81頁)

社会の敗者となる平凡な人物を文学の中心に据え、欠点を含むそうした人間の内面を描くことは日本の近代文学、特に日露戦争前後の自然主義文学の一つの特徴であると言える。日露戦争頃までに発展してきた「前期自然主義」については、片岡良一がその特徴を次のように述べた。

前期自然主義時代の文学は、(中略) そういう不幸の由来を探ろうとする傾向を、相当濃密に示すようになっていたのである。そうしてそこで、そういう探求の目を、外社会に向けようとするものと、逆に人間そのものの側に向けようとするものとの、二つの傾向に分化したのである。つまり、人間解放の前に立ちふさがる社会の中に、問題の根本的な所在を探ろうとするものと、そういう不幸な触着の由来を、人間そのものの内部に見出そうとするものとの、二つの傾向である。<sup>34</sup>

片岡の論述と以上にあげた「小百合」の引用を合わせれば、「小百合」の自然主義的な特徴が明らかになるだろう。「小百合」は「外社会」、ことに公教育や国家の権威、「道徳の束縛」に由来する「困難との争闘」を中心的に扱った小説であるが、同時に「内面」、ことに「秘密の悔悟」にも注目し、近代社会と人間を複雑に探求しようとする作品なのである。ことに社会に批判的な眼差しを向ける、消極的で病弱な白鳥自身は、まさにこの二つの側面に引き付けられて「小百合」を和訳し、社会と自分自身と苦闘する人間を後に自分の小説の主人公とした。「弱者・敗者」を文学の中心に描くという姿勢は、この作品の原題を「小百合」という題名に置き換えたことから明確に読み取れる。

## 6. おわりに

本論は和訳「小百合」について原文と和訳の詳細を明らかにし、この短編が教育雑誌『教育界』に掲載された意味を究明した。新進作家の正宗白鳥は「小百合」を雑誌『教育界』に発表することで、近代国家による公教育の諸問題というテーマを小説の前面に打ち出した。詰込主義や教師中心主義に対する批判を呈することで、明治日本における支配的な教育思想を再検討するように、教師たちに一つの刺激を与えたと言える。さらに、ドイツの公教育と政治を手厳しく訴える「小百合」はドイツの公教育と政治を模範とした、国家主義が膨張する日露戦争中の日本の大方針にも疑問を投げかけたと思われる。

こうした「小百合」の位置づけに加え、正宗白鳥自身が後に執筆した創作と「小百合」との関係も指摘し、日本におけるシェンキエヴィチ受容の側面を提示した。すなわち白鳥は、西洋において注目されたシェンキエヴィチ長編小説の浪漫主義と理想主義、キリスト教的な内容とは異なり、批判精神と消極主義を彼の短編小説から読み取った。そしてそれを社会との齟齬に苦しみ自分自身との葛藤にもがく弱者・敗者に注目する文学として提示した。それはまさに日露戦争前後の日本において流行した自然主義の特徴にほかならないものであった。本論が提示したこの結論は、日本におけるシェンキエヴィチの受容を研究する出発点ともなり、こうした課題に取り込む研究の可能性も示すものであると考えている。

## 注

- 1 Henryk Sienkiewicz “Z pamiętnika poznańskiego nauczyciela” *Niwa* t.16 (1879).
- 2 Marion Moore Coleman. *Polish Literature in English Translation: A Bibliography*. Cheshire Conn.: Cherry Hill Books, 1963. シェンキエヴィチの原文とその英訳に関する話は少し複雑であるが、以下の通りである。シェンキエヴィチの原文は二つのバージョンで出版された。“Z pamiętnika poznańskiego nauczyciela”（「ポズナンの教師の日記から」）はその一つとしてポーランドの雑誌 *Niwa* t.16（1879）に発表された。ポーランドのロシア占領地で生まれたシェンキエヴィチは、元々プロイセンではなく、ロシアの学校を批判の対象としたが、検閲を防ぐため、舞台をポズナンの学校に移した。ロシアの学校を舞台とする版は同年中に “Z pamiętnika korepetytora”（「教師の日記から」、*Gazeta Lwowska* No. 236-237-238（1879 Oct. 14-15-16））として出版された。自己検閲しなかった「ロシア版」は W. R. Thompson により英訳され、“Paul” という題名で *Catholic World* 39.231（June, 1884）に発表された。しかしながら、和訳「小百合」と “Paul” と “From the Diary of a



- Tutor in Poznan”を比較したが、正宗白鳥がこの“Paul”という翻訳を見た証拠はない。
- 3 八重樫美奈子「正宗白鳥『何処へ』から」『駒沢短大國文』13号、1983年3月、101頁。
  - 4 カーティンについては、次の論文を参照のこと。H.B. Segel “Sienkiewicz's First Translator, Jeremiah Curtin” *Slavic Review*. 24.2 (June 1965): pp. 189-214. Michael J. Mikos “New Light on the Relationship between Henryk Sienkiewicz and Jeremiah Curtin.” *Slavic Review*. 50.2 (Summer 1991): pp. 422-432.
  - 5 カーティンの翻訳スタイルについては Segel (同上) を参照。本論文の執筆者もカーティンの英訳と Casimir Gonski の英訳 (“From the Memoirs of a Teacher.” *Free Poland*. 1.14 (2 Apr. 1915): pp. 27-30, 1.15 (16 Apr. 1915): pp. 27-30) を比較したが、カーティンの翻訳の忠実さを確認した。
  - 6 Henryk Sienkiewicz. *Yanko, the Musician and Other Stories*. Trans. Jeremiah Curtin. Boston: Little, Brown, 1893: pp. 1-3. 和訳は発表者による。
  - 7 例えば、ノーベル賞受賞の際のスピーチで、シェンキエヴィチは「ポーランドは死んでいる、疲弊している、奴隷化されていると言われてきた。しかしこれがポーランドの勝利と生存の証だ」というように自分の文学とノーベル賞の意義を説いた (Horz Frenz (ed.) *Nobel Lectures Including Presentation Speeches and Laureates' Biographies: Literature*. Amsterdam: Elsevier, 1969: p. 45)。その他にも、シェンキエヴィチは社会運動に積極的に参加し、1901年や1906年に公開状で、ドイツ語教育に反発して学校ストライキを起こした小中学生を支援するよう呼びかけ、プロイセン当局による圧迫を厳しく批判した。1906年の公開状は強い言葉でプロイセンの政策を批判した。“After consultation with Polish leaders from Poznan, Henryk Sienkiewicz, who had received the Nobel prize for literature in 1905, addressed an open letter to the German emperor on November 19 in which he assessed Prussian policies in the following terms: “Terrible, deeply immoral, and impossible to justify are such laws, to which the response is the crying of thousands of defenseless children.” (John J. Kulczycki *School Strikes in Prussian Poland, 1901-1907: The Struggle over Bilingual Education*. New York: Columbia University Press, 1981: p.135)。シェンキエヴィチの公開状は西洋のメディアでも広く出版され、プロイセンに対する国際的な批判を起こした (Kulczycki, p. 64)。シェンキエヴィチの社会運動は『読売新聞』(1907年1月13日)にも報告された。
  - 8 Monica Gardner. “Sienkiewicz”. *The Slavonic Review*. 3.9 (Mar. 1925): pp. 528-529. Mieczyslaw Giergielewicz. *Henryk Sienkiewicz: A Biography*. New York: Hippocrene Books, 1991 (1968): p. 74.
  - 9 参考にした研究は次の通りである。Maria Kosko. *La Fortune de "Quo vadis ?" de Sienkiewicz en France*. Slatkine Reprints, 1976 (1935). William Lyon Phelps. *Essays on Modern*

- Novelists*. Library of Alexandria, 1918. Giergielewicz、前掲。Jerzy Krzyżanowski. *The Trilogy Companion: A Reader's Guide to the Trilogy of Henryk Sienkiewicz*. Fort Washington, Pa.: Copernicus Society of America, c1991. Edmund Kulakowski. "American Translations of Sienkiewicz." *Polish American Studies*. 15.3-4 (July-Dec. 1958): pp. 69-71. Clifford Ruskowski. "American Translators of Sienkiewicz." *Polish American Studies*. 15.3-4 (July-Dec. 1958): pp. 71-73. Frank Zielinski. "American Critics of Sienkiewicz." *Polish American Studies*. 15.3-4 (July-Dec. 1958): pp. 73-75.
- 10 E.J. Czerwinski. *Dictionary of Polish Literature*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1994: p. 381, Gardner, p. 531.
  - 11 Kosko, p. 67. イギリスとアメリカにおける新ロマン主義の流行は Phelps (p. 116) も指摘した。
  - 12 「シェンケーウィチ」『ブリタニカ国際大百科事典 大項目事典』[http://japan.eb.com/mb/article-115530\\_0](http://japan.eb.com/mb/article-115530_0) [2016/12/10]
  - 13 エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ、アンジェイ・タデウシュ・ロメル『日本・ポーランド関係史』柴理子訳、彩流社、2009年、12頁。ポーランドに対する日本のこの眼差しは既に東海散士の『佳人之奇遇』（1885-1897年）で見られる。亡国への共感と帝国主義への積極的な呼びかけという矛盾を孕む「敗者」の国家主義については、次の論文を参照。竹内加奈「敗者」のナショナリズム——東海散士『佳人之奇遇』を通じて』『社会科学』101号、2014年2月、47-81頁。
  - 14 勝呂奏『正宗白鳥——明治世紀末の青春』右文書院、1996年、18頁。正宗白鳥自身は日露戦争中の『読売新聞』批評家としての経験について「日露戦争時分の文壇」（『中央公論』1957年7月）で語った。
  - 15 正宗白鳥（剣菱）「戦時の文学」『読売新聞』1905年2月10日、1面。
  - 16 同上。
  - 17 処女作は「寂寞」（『新小説』、1904年11月）である。
  - 18 Kosko, p. 7; Horz, p. 41.
  - 19 Kosko, pp. 18-19; Waclaw Lednicki *Bits of Table Talk on Pushkin, Mickiewicz, Goethe, Turgenev and Sienkiewicz*. The Hague: M. Nijhoff, 1956: p. 220.
  - 20 吉田書籍『自然主義の研究 上巻』東京堂、1955年、463-475頁を参照。
  - 21 詳細は次の研究書を参照。Mark A. Jones *Children as Treasures: Childhood and the Middle Class in Early Twentieth Century Japan*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2010.
  - 22 呉秀三「教育と精神病」『教育界』1巻10号、1902年8月、51-59頁。このシリーズの最後の記事は『教育界』2巻4号（1903年2月）に連載された。呉秀三は日本における近代精神医学の基礎を築いた医学博士であった。

- 23 寺崎之治郎「小学教育を一層有効ならしめ且其の効果を永久ならしむる方法如何」『教育界』1巻6号、1902年4月、150-151頁。
- 24 菅学応(緑蔭)訳『児童教育論』文遊堂、1897年(1902年に『父母と子供』という改題で同じ文遊堂に再発行された)。山口小太郎・島崎恒五郎訳『エミール抄』開発社、1899年。
- 25 1901年に開校された姫路師範学校で試験制度を廃止し、寄宿舎に自治制度を導入した学長野口援太郎の新教育法はその例である。石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、1967年、322-328頁を参照のこと。
- 26 斉藤利彦『試験と競争の学校史』平凡社、1995年。
- 27 Christian Galan は *L'enseignement de la lecture au Japon. Politique et éducation.* (Toulouse: Presses Universitaires du Mirail, 2001) で小学校の国語を中心に教授法の変遷を検討したが、教科書・教師・国家中心主義をほとんど変わらない特徴として明確に提示した。
- 28 正宗白鳥「学問の価値」『読売新聞』1904年8月14日、付録1面。
- 29 正宗白鳥(剣菱)「随感随筆」『読売新聞』1905年7月23日、付録1面。
- 30 森有礼「文部省において直轄学校長に対する演説」『森有礼全集 第1巻』宣文堂書店、1972年、663頁。
- 31 ヘルバルトはペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) の影響を受け人間の自発性と近代的な市民の形成を重んじる側面もあるが、ツィラー (Tuiskon Ziller, 1817-1882) やライン (Wilhelm Rein, 1847-1929) というドイツのヘルバルト派学者はヘルバルト教育の目的と方法を曲げ国家主義と画一化を説いた。日本ではヘルバルトの教育思想が彼らを通して受容され、さらに再解釈された。教育の目的は教育勅語に沿った道徳的品性の陶冶とされ、ラインの五段階教授法(予備 (Vorbereitung)、提示 (Darbietung)、比較 (Vergleichung)、総括 (Zusammenfassung)、応用 (Anwendung)) は各授業を構成し、日本教育を画一化する形式主義となった。こうしたヘルバルト受容の皮肉な結果として1900年代における教育議論は、児童中心主義を説く教育者がヘルバルトの形式主義と注入主義を批判すると同時に、国家主義の強化を求める教育者がヘルバルトの個人主義と自由主義を非難するという噛み合わない論争が並立した複雑な状態となった。中野光「日本における「ヘルバルト主義教育」の考察を中心として」『日本の教育史学——教育史学会紀要』8号、1965年10月、156-163頁。山本正身「日本におけるヘルバルト派教育学の導入と展開」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』25号、1985年、67-74頁。
- 32 日本帝国が試みたいいわゆる「同化」政策とその「成果」は地域によって異なったが、「同化」は中心的な概念であった。詳細は以下の研究を参照。石田雄「「同化」政策と創られた観念としての「日本」(上)」『思想』892号、1998年10月、47-75頁。同上「「同化」政策と創られた観念としての「日本」(下)」『思想』893号、1998年11月、141-174頁。

駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996年。

- 33 突然戦争に焦点を当てる『教育界』の転換は出版社金港堂の戦略として解釈できる。稲岡勝が論文「金港堂の七大雑誌と帝国印刷」で指摘したように、金港堂は週刊の『日露戦争記』などを出版することで、他の出版社と共に「入り乱れて時局ものの出版戦争を演じた」が、「戦争物は日清戦争の頃のほとんど半分くらいしか売れなかった」ため、「金港堂に残ったものは大赤字である」（『出版研究』23号、1992年、195頁）。
- 34 片岡良一『日本自然主義文学研究』（片岡良一著作集 第7巻）中央公論社、1979年、44頁。